I-15

「黄檗様」という様式をめぐる諸問題について
崇福寺大雄宝殿と萬福寺法堂の平面構成の違いを中心として

On issues surrounding the style of Obaku-style”
As the differences center of the planar structure of Manfukuji Sermon halland and Sofukuji Buddhist temple

○助川陽平 1)　重枝豊 2)
Yohei Skegawa Yutaka Sigeeda

1. はじめに

「黄檗様」という言葉を建築史研究として最初に取り上げたのは関野貞(1)とみられる．関野は「黄檗様」について「江戸時代に黄檗宗に従い輸入されし建築様式は福建地方特有のものであって，北支はいふに及ばず，蘇浙地方のものとも面目を異にするものであった．余は従来の和様唐様天竺様に対しこれを黄檗様と名付けんと欲するのである」と記している．しかし，その後の文献には「黄檗様」という用語は積極的に使われていない．現在も建築大辞典には掲載がなく，建築用語として普及していない．このことは，「黄檗様」という様式の定義が定まっていないこと，地域的な限定的な様式とみなされているためとみられる．

初期の黄檗宗寺院の様式は江戸時代に中国・明より長崎に伝えられ，中国人工匠の手により明式の細部を採用した唐寺(興福寺，福済寺，崇福寺)が最初とされる．その後，隠元(2)の来朝，宇治・萬福寺創建により，黄檗宗は各地に広まり，寺院の造営がなされた．黄檗宗寺院の建築様式という場合に，長崎に伝来した様式と萬福寺に伝わった様式のどちらを標準にし，黄檗宗寺院を捉えればよいかという問題点がある．萬福寺は造営時に際して長崎の唐寺(興福寺・福済寺・崇福寺)を調べて構想を練った(3)とされているが，施工は日本人工匠による．長崎の唐寺と萬福寺の違いは工匠によるところが大きいとみられる．長崎の崇福寺について関野貞は「福建地方の様式を忠実に表している．」と述べているが，服部文雄(4)は萬福寺を「明末清初の様式によりながらやや日本化した技法を示す」と記し，純粋な中国の建築様式ではないとみなしている．静岡県にある黄檗宗の宝林寺仏殿，山口県の東光寺大雄宝殿は萬福寺の法堂，禅堂との類似点が指摘(5)されており，草創期の黄檗宗寺院においては萬福寺の建築様式を基にした可能性が高い．唐寺においては長崎県の真言宗清水寺が崇福寺の媽祖堂門の建築様式と酷似(6)しており長崎唐寺の直接の影響がうかがえる．これらのことは黄檗宗建築の様式は大きく萬福寺系と唐寺系という 2 つの流れが存在したと考えられる．

2-1. 先学の研究について

これまで黄檗宗建築は伽藍構成は萬福寺を標準に，立面・断面の様式に関しては長崎の崇福寺，興福寺を標準とされてきた．(7)伽藍構成に関しては山本輝雄による多くの論稿(8)があり，萬福寺で見られる禅堂，斉堂，仏殿からなるコの字型伽藍構成が黄檗宗寺院の基本で，崇福寺は特異な伽藍構成と位置付けられている．前述したように，関野貞は萬福寺を代表に取り上げ黄檗宗寺院の伽藍構成を示したが，黄檗宗寺院の伽藍構成に関しては山本輝雄により提案されたコの字型の伽藍構成をとる黄檗宗寺院が多くみられる．また絵図資料での検証もされており萬福寺を標準と考えることには妥当性がある．しかし，立面と断面の形式については横山秀哉(9)，関野貞(10)が触れているが伽藍構成と比べると研究が少なく，崇福寺を黄檗宗寺院の標準とするには疑問が残る．また，これまで平面構成についてほとんど触れてないことから，平面・立面・断面の構成を総合的にみる必要がある．

2-2. 問題点の整理

黄檗宗寺院の研究を進めるにあたり「黄檗様」の標準を明らかにする必要がある．そこで黄檗様もしくはそれに類似する遺構を中心に平面，立面，断面の詳細をそれぞれ検討する必要がある．

3. 萬福寺法堂と崇福寺大雄宝殿の比較

まず，萬福寺法堂と崇福寺大雄宝殿(11)の平面構成の

1：日大理工・院(前)・建築　2：日大理工・教員・建築

違いを明らかにすることによって黄檗宗寺院の様式に関する注目すべき要素を抽出してみたい.

萬福寺において最初期に建てられた法堂(1662), 禅堂(1663)は, 現存する長崎の崇福寺第一峰門(1644), 大雄宝殿(1646)を参考にしたとみられる. 萬福寺法堂, 禅堂以前に建てられた現存遺構は崇福寺第一峰門(1644), 大雄宝殿(1646)だけである. 萬福寺法堂と崇福寺大雄宝殿について平面の違いから検討してみる.

萬福寺法堂は桁行 5 間, 梁間 6 間, 1 重, 入母屋造, 桟瓦葺(当初は柿葺)で正面の 1 間通りを吹放しとし, 床を四半瓦敷とする。背面入側柱列の中央間に来迎壁を設け、その前面に法座を置く。柱はすべて角柱で, 母屋に四天柱があり、禅宗様建築にみられる減柱造を採用せず、古風である. 桁行の柱割は中央間が 19.3 尺, 脇間, 端間が共に 13.4 尺であり中央間と脇間の関係は 3 ; 2(枝割では 3 ; 2, 寸法値では 2,88 ; 2)となる. このことは柱割に関して中備の間隔寸法を考慮したためと考えられ, 禅宗様仏殿と同様の平面の性格がみられる. 梁間の場合でも中備の間隔寸法を考慮している. これらは中備間を 6,5 尺とし, 6, 5 尺グリッド上に柱を配置したと考えられる.

図 1 萬福寺法堂平面図　①から引用

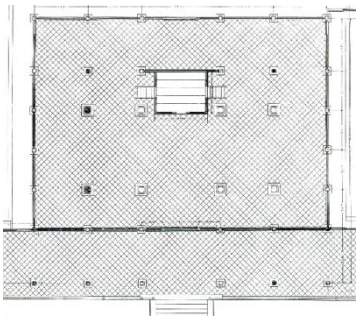
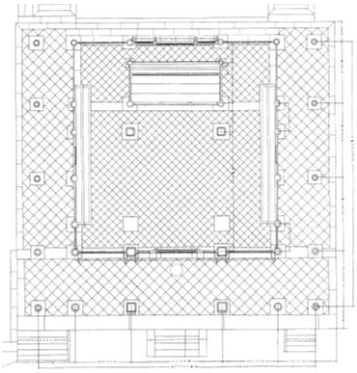


図 2 崇福寺大雄宝殿　②から引用



崇福寺大雄宝殿は桁行 5 間, 梁間 4 間, 2 重, 入母屋造, 本瓦葺で正面・両側面の 1 間通りを吹放しとし, 床を四半瓦敷とする. 堂内は背面に寄せて須弥壇を置き須弥壇前面を広くしている. 四天柱前方を抜いているため大虹梁を架けその上に束を立て棟木, 桁を受け, 化粧屋根裏とする。正面中央角柱他は各面とも全て円柱である。桁行の柱割は中央間 15,3 尺, 脇間 9,39 尺, 端間が 6,38 尺である. これらの関係は 5 ; 3 ; 2(正確には 5,000 ; 3,069 ; 2,085)となる. 萬福寺法堂同様に一定の寸法(例, 中央間の 15,3/5＝3.01)のグリッド上に柱を配置したと仮定した場合, 内部の四天柱にずれが生じ, グリッド上に柱が配置されない. 崇福寺大雄宝殿では 1 枝寸法に約 0.5 尺の数値がみられ枝割による計画が考えられる. (萬福寺法堂の 1 枝寸法は約 1.6 尺)しかし, 端間, 梁間後方では 0.5 尺の倍数にはならず, 桁行の中央間, 脇間と梁間前方から 3 間分を先に決め計画した可能性がある.

4. おわりに

萬福寺法堂と崇福寺大雄宝殿には平面の規模, 柱割, 寸法計画, 須弥壇の位置等に違いがみられる。また, 吹放し形式についても萬福寺法堂のような 1 面吹放しとする黄檗宗寺院は多く造営されたが, 崇福寺大雄宝殿の 3 面吹放しの黄檗宗仏殿はない. 今後は構造形式や意匠の違いについて検討する。

註

(1)関野貞「日本の建築と藝術」昭和 15 年 6 月 15 日　岩波書店 p. 55　(2)隠元は中国・明の福建省福州府福清懸生まれ. 臨済宗黄檗派の僧である. 承応 3 年, 長崎興福寺に入寺し, 寛文元年, 黄檗山萬福寺を開いた.　(3)櫻井敏雄・大草一憲「黄檗宗寺院の伽藍計画に関する研究－法雲寺の建築と伽藍計画に関する研究－」　昭和 58 年 3 月　美原町教育委員会　p. 38　(4)服部文雄「日本の建築 4　近世Ⅰ」昭和 51 年 9 月 10 日　第一法規出版株式会社　p. 169　(5)「重要文化財　寶林寺仏殿・方丈修理工事報告書」,「重要文化財　東光寺鐘楼・三門・総門・大雄宝殿保存修理工事報告書」において指摘されている.　(6)「長崎県の近世社寺建築」で屋根が一段低い 4 周の 19 世紀初頭頃と推測される付加部分に類似性があるとみられると述べられている.　(7)堀内仁之「聖寿山崇福寺の大雄宝殿について」日本建築学会関東支部第 43 回(昭和 47 年度)学術研究発表会　(8)主なものに「信仰に関わる場所としての黄檗派寺院の伽藍構成に関する歴史的展開過程について」福岡国際大学紀要№12　31－42 (2004)がある.　(9)横山秀哉「禅の建築」1967 彰国社の中で真言宗・臨済宗仏殿と比較し黄檗宗仏殿の特徴を述べている.　(10)(1)と同じ　(11)大雄宝殿は当初は 1 重の建物であったが延宝 8 年(1680)に上層を付加して 2 重とした. 当初小屋組の 1 重の軸部及び軒廻りまでは中国人工匠, 小屋組から屋根については日本人工匠が組み上げたと考えられている. 付加した 2 重部分は和風の手法が濃厚である.

参考文献

①「重要文化財万福寺通玄門・開山堂・舎利殿・祖師堂・寿蔵附中門・総門・鼓楼・法堂修理工事報告書」　昭和 47 年 12 月　京都府教育委員会　②「国宝崇福寺大雄宝殿・第一峰門保存修理工事報告書」平成 7 年 3 月　崇福寺　③鈴木充「日本の美術　201 号　江戸建築」昭和 58 年 2 月 15 日　至文堂　④川上貢, 吉川需「日本美術全集第 13 巻　禅宗の美術　禅院と庭園」1979 年 2 月 15 日　株式会社学習研究社